

神鍋スキー場の地理学的考察

下村 理恵子

兵庫県北部の神鍋スキー場は、年間スキー客40万人を数え、関西でも有数のスキー場となっている。また、スキーの他にも、夏にはスポーツ合宿・スクーリング・キャンプ等の好適地として利用され、関西に住む人々にとってなじみが深いものである。

私は、当スキー場の代表的な景観をなす火山灰土壌に広がる田畑、集落の大部分を占める民宿、各所に分散立地するグレンデ等から、スキー場開発と集落の関係・農業と民宿経営の関係が、当スキー場においてはどのようなものであるのかを明らかにしたいと考えた。さらに当スキー場がナショナルなスキー場ではありえず、関西のみから脚光を集めるリージョナルなスキー場であると思われるため、このことを立地条件から明確にするとともに、ナショナルなスキー場になりえないことが、スキー場経営・民宿経営にどのように影響を及ぼしているかをみていきたいと考えた。さらに、当地が全国的な農村の過疎化の波をどのようにうけ、どのようにそれからの更生をはかっているかをみたいと考えた。

以上の方法として、まず、当スキー場の立地条件を自然条件・交通条件・地元集落の地域的条件の3点から考察した。これによって当スキー場がリージョナルなスキー場であり、さらに地元集落の地域的条件がスキー場立地に有利であったことがわかる。

次にスキー場開発及び民宿経営による集落の変ほうを農業の変化・人口動向・産業構造の変化から考察していった。農業は、戦前の水稻・養蚕中心から、戦後は蔬菜栽培に重点が置かれる傾向にある。人口は、全体に減少傾向を示すが、集落間で若干のばらつきがみられる。産業構造の変化は、小売業・建設業・サービス業に大きな伸びがみられ、スキー場立地集落として典型的な変化が表われているといえる。

次に、当地における民宿の発生とその発展過程及び民宿の抱える問題点とその展望を考察した。まず、民宿を、当時の経済的社会的な状況からその起源をみ、さらに発展過程をみて、当スキー場の民宿の発生及び発展の地域的条件を明らかにした。さらに、当スキー場の民宿の抱える問題点として経営の不安定性をあげ、行政当局及び民宿経営当事者がこれにどう対応しているかをみ、農家の副業の域を脱しえない当スキー場の民宿経営の現状と将来の展望を考察した。

さらに、神鍋スキー場と、それとほぼ同一の交通条件下にある八千高原スキー場とを比較考察することによって、神鍋スキー場の地域的特色を一層明確にしていった。

以上のような考察の結果、神鍋スキー場は次のように表わされる。

○神鍋スキー場はリージョナルなスキー場であり、その立地条件から考えて、企業的スキー場の成立は困難で、従って民宿の専門化は今後も望めないものと思われる。

○民宿の経営形態が、畑の経営規模の大小によって集落間で民宿指向型と農業指向型に分化する傾向がみられる。

○スキー場経営・民宿経営によっても人口の社会減をそれほど阻止することができず、慢性的な過

疎化現象を呈している。

埼玉県春日部市の農業における都市化の影響

白石 祐子

春日部市は東京から約35Kmの距離、しかも交通的にも便利な所にありながらも、東京南郊、西郊に比べ都市化の遅れた地域と言われる北郊の、その中でも更に遅い県東部の低地帯に位置している。江戸時代は日光街道の宿場町として賑わい、以後も埼玉の穀倉地帯の一部をなし埼玉地域の中心ともなってきたこの地が、他地域の例にもれず近年急速な人口増加を見、変質してきている。

1.この一般に都市化と言われる現象が春日部においてはどのような性格をもって進行してきたのか。

2.先住民であった多くの農家はそれに伴いどう変化していったのか。そしてその際に水田地域であるということがどう影響していったか。

3.現在では少数派となっている専業農家、積極派農家はどのような形で農業を存続・発展させているのか。

を究明することを本論の目的とした。また、都市化の開始期が遅かったということが逆にプラスに働いて、都市化の悪影響を幾分でも遅延対応しえたのではないかという期待を持って本研究に臨んだことも付記しておく。

第一章では低湿地であるという自然条件、歴史などの概観を簡単に述べた。

第二章では都市化ということをもう一度ここで考え直してみ、結論的にはわかりきっていることかもしれないが、春日部のいわゆる都市化の性格を主に統計資料を中心に考察してみた。

第三章では全体的な春日部の農業の動向、そして行政の農業に与える影響、専業農家・積極派農家の経営、考えなどを主に聴きとりアンケートなどによって調査し、考察を試みた。

春日部の都市化は、昭和41年、大規模な武里団地の入居開始をひき金に始まったと判断される。そしてこれに始まる人口の急増により、転入者が多くを占めるようになると市の人口の持つ性格は大いに変化していった。この人口の急増は春日部そのものが持つ都市的吸引力によるものではなく、大都市東京の住宅地としての機能が押し出される形でもたらされ、これは農地転用の76.2%が宅地であることでも裏づけられる。そして周辺農村の中心地であるという性格は確かに持ち続けながらも、東京とのつながりを着実に強め、大都市東京の一部でもあるという二重構造をもつ典型的なBed Town化という過程をたどっている。

そして同距離圏にある他地域に比べればまだ比較的農村的色彩も残っているが、大勢はやはり兼業・脱農化への方向を着実に進んでいる。しかもその兼業化傾向は人口増加が急激になる以前、すでに昭和30年代には始まっていた。そして最も省力化の進んでいる稲作が主であったためにその傾向は更に促進された。しかし中には都市化のプラス面に目を向けた梨栽培農家、そして若く気骨のある後継者達の農家経営層もある。現在は後者は主として施設園芸を中心としている所が多いが、「兎に角一日中一生懸命働きぬいて何とか食べていければ…」という昔ながらの農業観ではなく、如何に合理的